



参考資料・関連ウェブサイト

『共同参画』『女性展望』『国際女性』がその年のCSWの報告を掲載

国連 NGO 国内婦人委員会編、『国連・女性・NGO 一活動の手引き』，
1997，市川房枝記念会出版部

外務省

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/women/index.html>

内閣府男女共同参画局

http://www.gender.go.jp/international/int_kaigi/index.html

UN Women (英語)

<http://www.unwomen.org/en/csw>



作成：独立行政法人国立女性教育会館

監修：目黒依子（上智大学名誉教授・国連婦人の地位委員会前日本代表）

国連婦人の地位委員会 (CSW) 早わかり

Commission on the Status of Women

1. CSW とは

国連婦人の地位委員会 (Commission on the Status of Women, 略称 CSW) は、国連経済社会理事会 (ECOSOC) の機能委員会のひとつで、グローバル政策決定機関として、ジェンダー平等と女性の地位向上を専門に取り組んでいます。CSW は、ECOSOC の 1946 年 6 月 21 日の決議 11 (II) において、政治、経済、市民、社会および教育分野における女性の権利を促進する理事会への提言と報告をまとめることを目的として設置されました。CSW の任務は女性の権利分野において早急な対応を要する喫緊の課題について、ECOSOC に提言をおこなうことです。

加盟国代表、国連機関、ECOSOC の協議資格のある NGO 等の関係者が、毎年ニューヨークの国際連合本部の CSW 年次会合に集まります。

CSW の年次会合は通常 2 月～3 月に 10 日間開催され、ジェンダー平等と女性のエンパワメントに向けた進捗状況を審議し、問題点を明らかにし、国際的な基準や規範の合意を形成し、ジェンダー平等と女性のエンパワメントを世界中で推進するための政策を策定するための会議となっています。

2. CSW の仕組み

CSW の事務局は、ジェンダー平等と女性のエンパワメントのための国連機関 (英語通称: UN Women) が担当しています。UN Women はさまざまな活動において CSW に多大な支援をおこない、市民社会の代表者による CSW 会合への参加を積極的に促進しています。

CSW の年次会合の会期中は、年間テーマに沿った政府代表演説やハイレベル円卓会合、対話型専門家パネルが開催されます。また過去のテーマの進捗状況を確認するための会合や、各国政府、国連機関が主催するイベントや NGO が主催するイベントが国連ビル内外で開かれます。


3. 優先テーマ

CSW の活動方法と年次会合で取り上げるテーマは、CSW の上位組織である ECOSOC が先に採択した決議によって決まります。時のグローバル状況と連動させながら女性の人権の推進やエンパワメントに係る基本方針を定めた「北京行動綱領」の 12 重大領域を単独または組合せた優先テーマが選ばれてきました。

第 52 回 (08 年) の「ジェンダー平等及び女性のエンパワメントのための資金調達」は初めて実施を促す資金に焦点を絞ったテーマで、各国の実施促進の要に触れると同時に効率化を求められる国連機関 CSW であることを示すものでした。

第 57 回 (13 年) では「女性及び女兒に対するあらゆる形態の暴力の撤廃と防止」が取り上げられ、日本でも課題となっている IT を駆使したサイバー空間での暴力への対応や、男性とのパートナーシップを通して暴力撲滅を進める取り組みなどが議論されました。

「北京会議」から 15 年経った「北京+15」以降、直近 5 年間の CSW の年間テーマは下記の通りです。

- 
- ▶ 第 54 回 (2010 年)
「北京宣言及び行動綱領」と第 23 回国連特別総会「女性 2000 年会議」成果文書の実施状況の評価 (「北京 + 15」閣僚級会合)
 - ▶ 第 55 回 (2011 年)
「完全雇用とディーセント・ワークへの女性の平等なアクセスの促進のためを含む教育、訓練及び科学・技術への女性と女兒のアクセス及び参画」
 - ▶ 第 56 回 (2012 年)
「農山漁村女性のエンパワメント及び貧困・飢餓撲滅・開発・今日的課題における役割」
 - ▶ 第 57 回 (2013 年)
「女性及び女兒に対するあらゆる形態の暴力の撤廃と防止」
 - ▶ 58 回 (2014 年)
「女性及び女兒に関するミレニアム開発目標 (MDGs) の実施における課題と成果」

4. CSW の成果

*合意結論

年次会合での優先テーマについて討議した結果を、合意結論 (agreed conclusions) という形式でまとめることが、経済社会理事会決議 2006/9 により定められています。その内容は、国連事務総長報告の分析や提言などを基に、優先テーマに関する各国の政策実施状況と成果および課題を確認し、更なる有効な実施方策についての提言を政府や国際機関、市民社会に向けてまとめたものです。

合意結論はその名称どおり、国連加盟国・国際機関・市民社会による議論と交渉を経て合意された文書で、提言の実施についての拘束力はないものの、その実行は、国際社会の信頼や支援を得るために重要です。実態分析や提言の内容・文言について合意が困難になると、表現方法の修正など合意に向けての交渉努力を重ねて、CSW の主要文書は作られます。

*決議

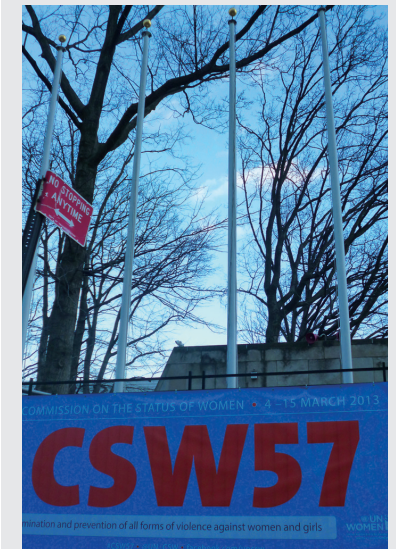
もう一つの重要な文書は、ジェンダー平等・女性のエンパワーメント関連の多様なテーマに関する決議です。決議文の提案国とその内容に賛同する国々が中心になって作成した案が、メンバー国による投票にかけられます。恒常的に存在するとみなされる課題に関する決議は継続的に取り上げられ、採択に向けた交渉がおこなわれます。新たに浮上したジェンダー課題については、その緊急性や深刻さについて人権・人道的視点から判断することが CSW では慣例となっています。投票により採択される決議は一定の拘束力を持ちます。

* CSW の成果と日本

世界女性会議、特に第 4 回の北京会議に市民社会からの参加が増加したことで、NGO の関心が広まり、内閣府男女共同参画局が CSW における日本の国内本部機構 (national machinery) と位置付けられてから、CSW 年次会合への内閣府のみならず国内関係省庁からの参加が定着しています。年次会合では、日本政府は国内施策における男女共同参画事業や日本の国際支援 (ODA) 事業について発信し、合意結論や決議の交渉に積極的に参画しています。

例えば、2012 年の第 56 回会合では、日本政府が提案し 50 カ国が共同提案国となった「自然災害におけるジェンダー平等と女性のエンパワーメント」決議が採択されました。スマトラ沖地震直後の CSW での同類の決議や、アフガニスタン紛争後の救援・復興決議に日本政府も積極的に関わり、大規模災害や紛争の被害者支援・復興とジェンダーの領域での日本の貢献が特筆されます。

CSW の成果による国内施策への最大で継続的な影響は、性暴力の可視(見える)化と対策にみられるといえます。



5. NGO の参画

CSW の運営は、世界各国の NGO の参加、協力によっても支えられています。ニューヨーク市内で活動する 80 団体から構成される NGO CSW/NY が、UN WOMEN に協力して、NGO や一般参加者を受け入れ、CSW 開催前日の日曜日に、年間テーマについてのオリエンテーション (NGO CSW フォーラム・コンサルテーション) を実施しています。NGO CSW/NY は、CSW 期間中に、地域別、課題分野別の交流や会期のテーマを中心として多様な手法による企画 (パラレル・イベント) を取りまとめ CSW 参加者間のネットワーク構築やジェンダー平等推進のための好事例の共有、政府へのロビー活動などを展開しています。毎朝のモーニング・ブリーフィングも NGO が各国政府へのロビー活動をするための重要な情報発信です。

日本の NGO も CSW 期間中に日本政府の国連代表部との共催を含め様々なイベントを実施し、日本の市民社会からの情報発信を活発におこなっています。



また、「北京行動綱領」の 5 年毎のレビュー「日本 NGO レポート」の日英語版の発行や CSW の公式文書の翻訳、CSW 参加者による事前の学習会、帰国後の報告会の開催など、CSW と連動した活動を継続しています。

6. 委員国 (2013 年 2 月現在)

CSW は、ECOSOC が以下のような地理的配分をもとに 4 年の任期で選出した、45 カ国の委員国で構成されています。日本は 1956 年の国連加盟前から CSW にオブザーバーを送り、1958 年以降 65 年 (18 回) と 76 年 (26 回) を除き、継続的に委員国となっています。

アフリカ 13 カ国
アジア 11 カ国
ラテンアメリカおよびカリブ地域 9 カ国
西欧およびその他の諸国 8 カ国
東欧 4 カ国

7. 歴代日本代表 (敬称略) (2014 年 1 月現在)

谷野 せつ	(1958 ~ 1963)
高橋 展子	(1965 オブザーバー参加)
藤田 たき	(1966 ~ 1974)
森山 真弓	(1976 オブザーバー参加)
大羽 綾子	(1978 ~ 1980)
縫田 暁子	(1982 ~ 1984)
有馬真喜子	(1986 ~ 1997)
目黒 依子	(1998 ~ 2010)
橋本ヒロ子	(2011 ~)